

毎年9月は がん征圧月間です!

現在、日本では国民の2人に1人が生涯に一度はがんを患うとされますが、医学の進歩により早期発見・早期治療で治るがんも増えています。毎年9月は「がん征圧月間」です。適切な時期にがん検診を受けることで、大切な命をがんから守ってください。

公益財団法人日本対がん協会
2022年度 がん征圧スローガン

がん検診
私にできる がん対策

❗「胃がん」は早期発見で治せるがんです。

◎胃がんは減っているの?

日本では、近年胃がんに関連するとされているピロリ菌の感染率が、どんどん減っています。それに伴い胃がんもいずれは減少すると考えられています。

ただし、最新の統計(2020年)でも日本人の死亡数の順位では第3位と未だ高いのが現状です。一つの原因として高齢者が増えていることが挙げられています。胃がんは日本人が罹りやすいがんの一つであることをもう一度強調したいと思います。

胃がんの内視鏡治療は、後遺症の少ない低侵襲治療であり、早期発見できれば外科手術や抗がん剤治療などを受けることなく治癒することが可能です。そのためにも検診を受けていただくことは重要です。

◎ピロリ菌を除菌したので検診は受けなくてもいいの?

現在、私たちが静岡がんセンターで行っている胃がんの内視鏡治療を受ける患者さんの多くが、ピロリ菌の除菌治療をすでに受けた方です。ピロリ菌は乳児期に胃に感染し、長い年月をかけて胃がんの母地となる萎縮性胃炎という状態にします。萎縮性胃炎のほとんどない10代、20代のときに除菌したならばよいかもしれませんが、ある程度萎縮性胃炎となっている年齢での除菌は、胃がんの発生を完全に防ぐものではありません。「除菌をしても検診は必要」なのです。

◎コロナ禍と胃がん検診

今後統計データの集積が進み、明確になると思いますが、私たちはコロナのために検診を控えてしまい、進行した状態で見つかる患者さんが増えることを危惧しています。内視鏡は一回一回高水準消毒と呼ばれる、コロナウイルスを除去できる消毒を行っており、スコープを介した患者さんから患者さんへの感染は極めてまれです。バリウムによるX線検査も同様です。多くの患者さんが集まる病医院に足を運ぶことを躊躇する気持ちはわかりますが、病医院は感染対策に努力しております。また検診を毎年受ける方もおられれば、まったく受けない方もいるのが胃がん検診の問題点です。普段検診を受けていない方は、50歳、60歳などの節目のときなど、是非一度検診を受けていただきたいと思います。

静岡県立
静岡がんセンター
副院長・内視鏡科部長
小野 裕之 先生

1962年北海道生まれ。1987年道立札幌医科大学医学部卒業。同年札幌医科大学第4内科入局。1991年より国立がんセンター中央病院にてレジデント、チーフレジデント、スタッフとして2002年まで勤務。同年9月静岡がんセンター開設と同時に内視鏡科部長として着任。2012年から副院長兼務。専門は消化管内視鏡診断および治療。ITナイフの開発者の一人として、ESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)の日本および世界への普及に努めている。



❗受診控えで手遅れにならないために。

◎基本的な感染対策を徹底

新型コロナウイルス感染が始まってから、早くも2年半が過ぎようとしています。この間、ウイルスは変異を繰り返し、感染の波が何度も私たちを襲ってきました。ウイルスが変異するたびに感染力が高まる一方、重症化率は下がってきています。このため最近、「新型コロナはどうせ風邪と同じ」として、軽視する風潮が一部にみられます。確かに新型コロナウイルスは風邪のウイルスの仲間ですが、現在がんを治療している人など、基礎疾患を持っている人や高齢者にとっては、新型コロナは決して単なる風邪ではありません。こうした人は、一旦新型コロナにかかると重症化するリスクが高いため、ワクチンを積極的に接種するとともに、不織布マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保、手洗いなどの基本的な感染対策をしっかりと行い、感染者が多い時期には人込みを避けるなど、感染から身を守る行動を同居家族の方と一緒にしていただきたいと思います。

◎自覚症状が乏しい早期がん

医学の進歩によって、今ではがんにかかっても約6割の方は治る時代になりました。しかし、残念ながら4割の方は今でも治すことができません。確実にがんを治すために最もよい方法は、今の時代でも早期発見です。多くの人は、がんにかかると苦しい症状がでると思っておられます。しかし、ほとんどのがんは、

早期の段階ではこれといった症状を現しません。実は、がんは静かな病気なのです。早期発見のためには、何となくとも思っても積極的に検診を受けることが大切です。

◎コロナ禍でも定期的ながん検診を

新型コロナが流行し始めた当初は、各種のがん検診が中止になりました。また、感染を恐れた患者さんの受診控えもおこりました。こうしたことによって、残念ながらがんの発見率が低下しました。またその影響で、がんが進行して発見される患者さんが増えているように感じています。新型コロナも怖い病気ですが、がんはもっと怖い病気です。何となくとも思ってもがん検診を受けましょう。少しでもおかしいなと思ったら、医療機関を受診しましょう。がんが見つかったら手遅れにならないよう、今こそ自覚的な行動が大切です。

静岡県立
静岡がんセンター
病院長
上坂 克彦 先生

1982年名古屋大学医学部卒業、1997年ハーバード大学留学、2002年静岡がんセンター肝胆膵外科部長、11年同副院長、20年病院長、現在に至る。日本外科学会代議員・指導医、日本消化器外科学会評議員・指導医、日本肝胆膵外科学会評議員・高度技能指導医、日本膵臓学会評議員・指導医、日本胆道学会評議員・指導医などを務める。



がんを早期発見するためにも定期的ながん検診をおすすめします。